北山茂夫著

# 大化の改新

岩波新書

406

北山茂夫著

# 大化の改新

岩波新書

406

北山茂夫

1909年和歌山県に生まれる
1934年東京大学文学部国史学科卒業
専攻—日本古代史
著書—「萬葉の時代」
「藤原道長」(以上岩波新書)
「日本古代政治史の研究」
「奈良朝の政治と民衆」
「大仏開眼」「萬葉の世紀」
「萬葉の創造的精神」
「平安京」「王朝政治史論」
「大伴家持」

大化の改新　　岩波新書(青版) 406

1961年1月20日　第1刷発行 ©
1974年6月20日　第16刷発行

著　者　北山茂夫

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行者　岩波雄二郎

東京都板橋区板橋4-47-7
印刷者　山田博

発行所　東京都千代田区一ツ橋 2-5-5　株式会社　岩波書店

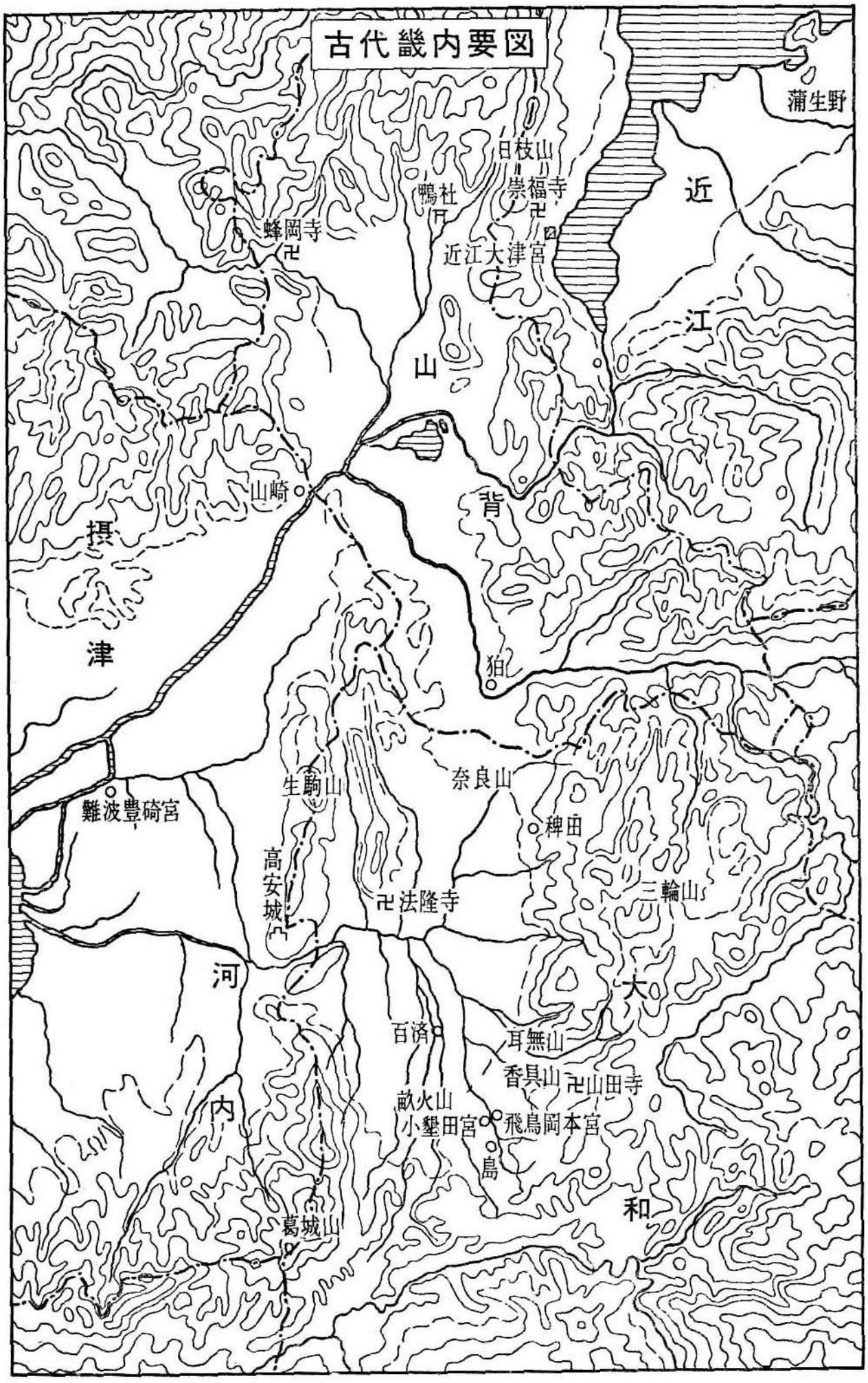
落丁本・乱丁本はお取替いたします　　三陽社印刷・永井製本

み吉野の　吉野の鮎

鮎こそは　島辺も良き　え苦しゐ

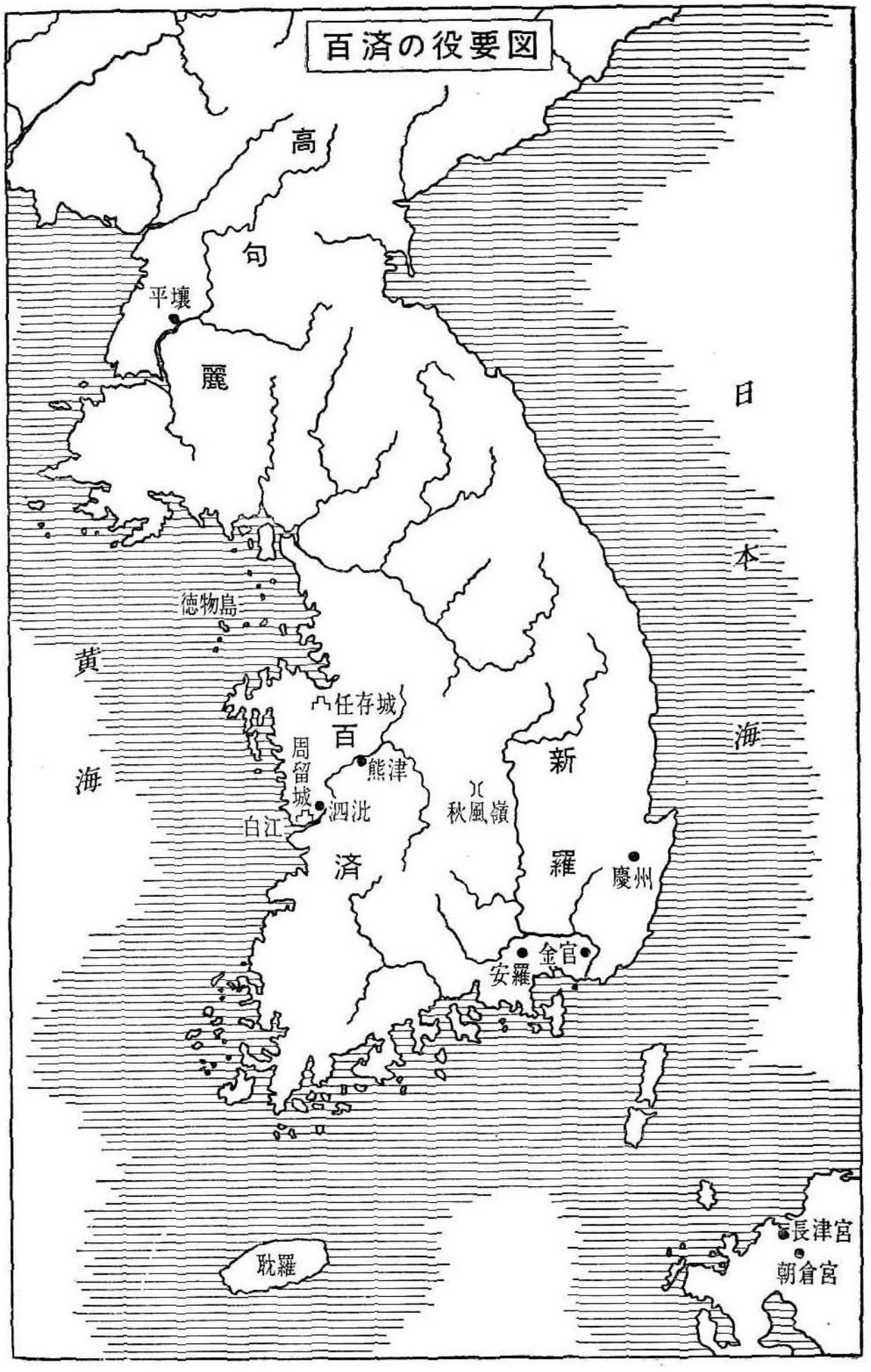
水葱の本　芹の本　吾は苦しゐ

「日本書紀」巻二七。なお本書二二一頁参照






此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com


百済の役要図
高
句
麗
平壤
日
本
海
黄
海
徳物島
任存城
百
済
熊津
周留城
泗沘
白江
秋風嶺
新
羅
慶州
金官
安羅
耽羅
長津宮
朝倉宮

序章のカットは、現存の「古事記」写本のなかで最も古い真福寺本の、継体記の部分である。そこに「此の御世に、竺紫君石井、天皇の命に従はずして、多く礼なかりき。故、物部荒甲の大連、大伴の金村連二人を遣して、石井を殺しめたまひき」とある。本書の一二頁でとりあげるこの国造の大叛乱がいかに深刻な衝撃をヤマト朝廷に与えたかは、ことさらにこの事件だけをここに特筆したことからも十分にうかがわれる。なお、これの討伐にあたった将軍は、「書紀」では、大連物部連荒甲だとされているが、「古事記」は、かれと大伴連金村との共同によるとのべている。これは有力な一異伝とされねばならぬであろう。

序章　動乱の六世紀……一

第一部　大化改新史

1　蘇我臣入鹿……二六
2　聖徳太子家の悲劇……三三
3　中大兄、鎌足らによるクーデタ……三八
4　大化新政府の樹立……六三
5　改新の詔……七三
6　天下の公民……八六
7　官人支配への道……一一七
8　右大臣の横死……一二八
9　白雉三年前後……一三六

10 みすてられた天皇……一四七

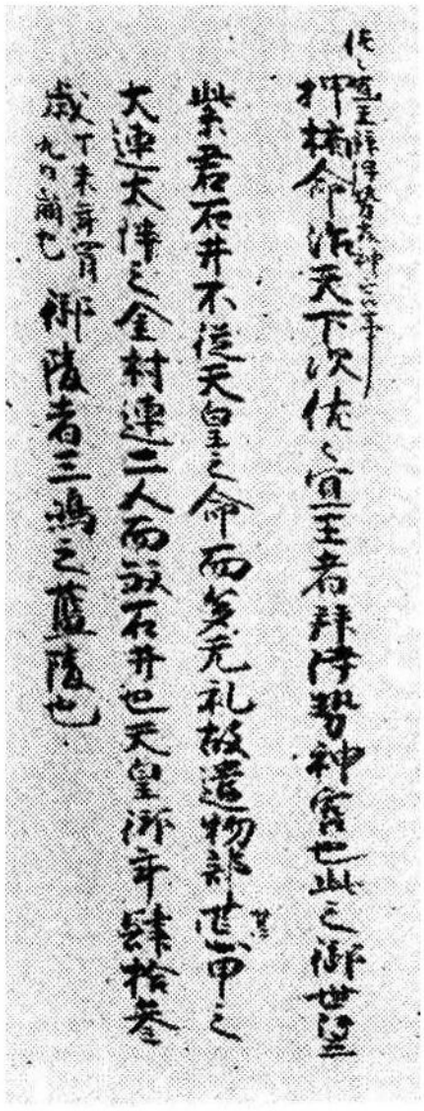
第二部　新政の後に来たもの

1 有間皇子の変……一五四
2 百済の役……一六三
3 近江遷都……一七四
4 宮廷人の恋と歌と……一八六
5 天智天皇の末路……二〇〇

附録
I 古代冠位制変遷表
II 皇室系図
III 蘇我大臣家系図
VI 略年表

あとがき

# 序章　動乱の六世紀



古事記写本（真福寺蔵）

幾十万の若い世代の人々が、春と秋の行楽の季節に、奈良、京の古都を訪れる。京都の賀茂川畔に住むわたくしは、街角にたたずんで、幾台もつづく大型バスにあふれるかれらの旅行姿に目をとめることがしばしばである。

修学旅行の集団は、旧都の古い神社、あるいは大寺を巡歴し、古蹟の片影や仏像をカメラにおさめて帰っていくらしい。あわただしい旅の日に、かれらはふと、教科書でおそわった「万葉集」の名歌をおもいうかべて、現代にのこされた眼前の遺物あるいは旧蹟の背後に、古代に生きた人間のイメージを心に描くことがあるかもしれない。そこまでいかないにしても、いにしえの力にみちた遺物の印象は、かれらに、漠然としたものではあれ、古代への幻想をいだかせずにはおかないであろう。千年をこえる時の流れが破壊しつくすことのできなかったあれらの遺物には、古代人の独特な創造的精神が宿り、それがじかに、観る人々に訴えかけるからである。まさしくあるがままの古代が凝結してそこにあるといっていい。

それらのすべては、古代の人民が所有し享受したものではなかった。例外なく、多くは天皇に属し、他のものは、貴族らの生活の内部に握られていた。東大寺の正倉院のあり方を想起す



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

るがいい。それらは一般への公開からはおよそ遠い、天平時代の文化財であった。ただ、あれらの古代の遺物の創造には、享受からまったくしめだされた人民が、主力となって関与したのである。そこにはっきり創造と享受の分裂、あるいは背反が示されていた。古代の遺物についてのみこういう関係が指摘されるのではない。

古代のもっともすぐれた詞華集である「万葉集」もまた、貴族集団だけの共有財産であった。農民の歌がほんのわずか、貴族の立場から採取されたにとどまっている。

若い旅行者の群は、そういう点にまでたちいってしちめんどうくさく考えるわけではあるまい。現代はともかくそれらはいちおう公開されて、観覧料さえはらえば自由にみられる社寺の一財源としての観せ物になっているのだから。ここでは、どうやら、さしもの古代の権威も、色あせているかのごとくである。

だが、古代への甘美な幻想は、旅行者の胸に結ばれて消え去らないのではなかろうか。あれらの遺物を創造しえた古代の繁栄というあの幻想が。

　　み民われ生ける験(しるし)あり天地(あめつち)の栄(さか)ゆる時に遇へらくおもへば　九九六

という万葉人の声が、そのロマンティックな幻想のなかからきこえてくるかもしれない。うたは、その幻想に一君万民の盛世というムードをつくりだす。いにしえの王家の栄光は、現代の保守勢力の象徴である天皇をつつみこんでしまい、また古代の人間がまま偶像視されたりする。

幻想には、古代の暗黒はいりこんでこない。もっとも、ここまでくれば、その幻想には、社会科、国語の学校教育やマス・コミによる強い作用がはたらいているというほかない。

わが古代について、そうした遺物からそれぞれの史的幻想、あるいはたぶんに耽美的なヴィジョンをおもいえがくことは、わたくしたちの自由な愉楽のひとつである。誰もが多かれ少なかれ、若い日にそれを経験して心の奥にしまっているのだ。

しかし、現代文明の見地から、一歩ふみこんで古代の遺物、あるいは同時代の抒情詩に考察の眼をむけるとすれば、わたくしがさきに指摘した、あの創造と享受の分裂という歴史的事実は、どういう関係に由来するのかを、自分自身に問わないではすまされないであろう。あれらの遺物を創造した古代人の世界、すでに実体を歴史の流れに没し去ったひとつの時代への探究に、わたくしたちの関心がむけられはじめるのである。そのとき、古代への詩的な幻想が歴史学的探究の支えになっている。古代史の専門家の場合でも、幻想が研究の素地になっていることが存外に多い。

奈良や京都の、古代の遺物のほとんどすべては、天皇や貴族の生活における、ある開化からじかにつくりだされ、同時に、享受されていたものである。それならば、かれらの生活と精神におけるある開化の直接の起源あるいはスタートは、わが古代史のうえでいつと考えたらいい

のか。

ずばりとわたくしは答えよう。それの直接の起源は、六四五年六月の中大兄皇子、中臣連鎌足らによるクーデタの成功と、それを転機として開始された政治改革が急ピッチに進行した年代に求めねばならないと。

日本史の概説でふつう「大化の改新」といわれているのが、その年代の政治史的特徴にふれての呼称である。奈良朝の官寺、あるいは古社、また平安時代前期の諸文物、「万葉集」と「源氏物語」――それらの創造は、直接の起源を近くまた遠く大化の改新のなかに発している。極端ないい方をすれば、大化の改新という政治改革を経ることなしには、そういうあまたのゆたかな創造は営みえなかったであろう。たとえ文化の発現が見られたとしても、いまわたくしたちに伝来されているものとはずいぶんちがったものになったはずである。

大化の改新は、そういう決定的な重みを、日本史のうえにあらわしている。七世紀の中葉という時点で、クーデタを敢行した人々は、貴族による人民支配のありようを更新し、またその政治の方向づけを行なったのである。その政治改革を強く促がしたものは、海外の先進文明、それをになう新興国家の力にほかならなかった。わたくしが、まえのところで、天皇や貴族の生活と精神におけるある開化に言及したとき、外来の諸文物を貪婪に摂取しあるいは模倣する過程に生じた著しい事態を念頭においていたのである。

わたくしは、第一部のいわば本論で、クーデタとそれ以後の政治改革を、天皇を中核とした貴族、地方豪族と農民との基本的対立を中軸に設定しつつ、それにたいしては副次的というほかない対立、すなわち権力をめぐっての皇族、貴族ないし地方豪族の間の血腥い抗争を究明してゆくつもりである。そこに成立した古代国家の新しい諸制度を中心にあれこれ考証し解説するという学界の流儀にしたがわず、むしろ、諸階級の闘争を通じて、政治的リーダーシップをにぎる人々が、それらをつくりだしていく関係あるいは行動においてとらえたいとおもう。

そして、わたくしは、第一部、第二部の全叙述をもって、大化の改新が、七世紀中葉の全人民、すなわち生産者の諸階層にとって何であったかの根本的な問いに答えることになろう。わたくしもまた、年少の時代以来の古代への幻想をこわすことなしには、この仕事をすすめることができないような気がしてならない。

大化の改新は、古代における新時代へのスタートを告知するが、他面では、それ以前の国家生活の到達点であるともいえよう。これまでの諸家の歴史叙述は、この改新とそれの四〇年まえの推古朝の事業とを結びつけて考え、後者を改新政治の先駆あるいは前提というふうに評価してきている。

戦後の諸研究においては、さらに遡って、六世紀以来の国勢の動向との関連において、推古朝の事業、ついで大化の改新のになう歴史的意義を解明しようという傾向が強い。そして、こういう広大な歴史的展望に立てば、古代政治史における大化の改新の位置づけも、はるかに安定したものになることは疑いない。

ところが、わたくしは、その六世紀史にほんのわずかしかページをさくことができない。この本は改新政治の実態の分析に、主要な目標をおいているからである。さしずめ第一部への導入という点から、ごく簡略なスケッチを描いてみよう。

六世紀初頭の日本は、動乱の様相をあらわしていた。それは、四世紀の後半までに成立した列島の政治的支配者の政府、すなわちヤマト朝廷が、最初に経験したかなり長期にわたる試練を意味した。

ヤマト朝廷の首長である世襲の大王たち——後の天皇にまっすぐにつらなる父祖たち——は、おおよそ三つの権力関係をその一身に体現した、デスポット的存在であった。かれは、第一に、中央のヤマト朝廷の権力をになう大小の氏族による政治的結合の主軸であり、かれの血統のみが王位につきうるという特権が氏族らによって承認され擁護されていた。氏族らは、王権の世襲制に疑いをさしはさんだり、あるいはすすんでそれの破壊への試みをなすことがなかったよ

うである。王家の断絶、また王位継承をめぐっての抗争はいくたびもくりかえされたが、王家の血統以外の氏族にとってかわられるという事態を、史上に確証することはできない。それは王家独自の強さによるよりも、氏族の性格、あり方にもとづくところが多い。

第二に、ヤマト朝廷は、列島の諸地域を服属させていたが、地方には、なかば独立の伝統と勢力を保持する政治的首長たちが蟠踞(ばんきょ)していた。それらの首長を、ヤマト朝廷はひとしなみに国造(くにのみやつこ)とよぶようになった。しかし、その政治的独自性が否定されたわけではない。かれらのヤマト朝廷への服属は、もっぱら大王を媒介とするものであった。かれらは、大王家に采女(うねめ)と舎人(とねり)を貢上していた。

第三に、ヤマト朝廷は、すくなくも四世紀以来、朝鮮の南半に政治力を伸張させ、いわゆる任那(みまな)の地を拠点として、そこに「内官家(うちつみやけ)」を設置して、百済、新羅をも制圧していた。そして、ヤマト朝廷は、北鮮に侵出してきた高句麗と激戦を重ねながら、相互に拮抗するという態勢をとっていた。任那の諸小国、あるいは百済、新羅、さらに高句麗、また中国(江南の宋朝)にたいして、ヤマト朝廷を代表するものは、一貫して大王たちであった。

四七八年、宋朝の順帝から「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大将軍、倭王」という長たらしい、しかしかれの古代君主としての政治的属性、その野望をいかんなく物語る称号を授けられたヤマト朝廷の大王武(雄略)は、宋の皇帝への上表文のなか



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com